

周りのことも考えよう

校長 森 和久



11月の始めには、1年生から5年生による縦割り遠足と6年生の修学旅行を実施しました。どちらも一緒に参加しましたが、本校の児童の節

度ある行動はとても立派だなということを強く感じました。とりわけ、下級生の気持ちを汲みながら班をまとめていた5年生、一人一人がどう行動したら良いのか考えることができていた6年生は、さすが高学年だと感じました。

一方で、11月末にバス・地下鉄でのマナーについて、本校児童に残念な様子が見られた旨のお知らせを続けて頂戴しました。全体で行動する際には、守るべきマナーが意識されていても、日常の場では、その意識が飛んでしまうということは、誰しもありがちなことではあります。とりわけ親しい友だち数人といっしょになると、親しい友だちの中だけで「世界」を形成してしまい、その「周り」に人がいるということが忘れられがちになります。当然世の中で生きていくためには、自分たちの「世界」の「周り」のことを考えることができる視点を持つことが大事です。

今月の目当ては「周りのことも考えよう」です。この目当ては、7・8月の「相手のことも考えよう」という目当てとつながっており、「も」という言葉で意図しているのですが、まずは自分の思い・考えを大事にする。そのうえで、自分と直接関わる相手のことも考える。そしてさらには自分たちの周りの人のことも考えるという考え方ができるようになることを意図しています。「人間になろう」という本学園の理念は、「ひとを大切にできる人間 ひとと支えあえる人間 自らががんばれる人間」と整理されているのですが、その考え方にも通じる月目標です。

「車のスピードが上がると運転者の視野は狭くなる」

というのは自動車教習所でよく言われることですが、それと同じように自分たちの世界に集中し、テンションが高くなっている状態は、視野が狭くなります。楽しく熱中している状態、集中して何かに取り組んでいる状態はとてもよい状態ともいえるのですが、そういうときは、自分の視野が狭くなり、周りが見えない状態になっているのです。それは周りに迷惑をかけるというのみならず、危険が感知しにくくなっている「危ない状況」なのだという事を、頭の片隅で意識できる、冷静な目をもつことができるよう、朝礼などでも話をして参りたいと考えております。

「自分・相手・周り」を冷静に見つめる目をもつことは、世の中で人と支え合いながら生きていくためにとても重要なことだと思いますが、それを考えるヒントとして「メシが食える大人になる！よのなかルールブック」(高濱正伸 日本図書センター)という本から、いくつか引用させていただきます。このところ本屋さんで平積みされているので、読まれた方も多いたと思いますが、お子様とそれぞれの文の意味を考えてみられるのもよいのではないのでしょうか。

- 自分の時間と同じように他人の時間も大切にする。
- 身近な人にこそ、ていねいな態度を。
- 「わかってもらえない」とは言わない。
- 他人を批判したくなったら、「自分はどうなんだ」と考えてみる。
- 自分とはちがう意見にも素直に耳をかたむける。
- 「自分はひとりで生きられる」なんてかんちがいない。
- 「ありがとう」を口ぐせに。
- 親にカンペキを求めすぎない。
- まず自分が幸せになって、それから人を幸せにする。

